

小児保健システムの中での発達障害 2次スクリーニングに関する報告

— 11年間の発達相談について —

我妻則明*

(1994年7月26日受理)

Noriaki Azuma

Report of Second Screening for Developmental Disorders
in Child Health Care System

— About Developmental Consultation for Eleven Years —

要 旨

1982年から1993年まで11年間にわたって、岩手県内の某市で隔月に発達相談を実施してきた。この対象となった74名について報告した。この発達相談は、2次スクリーニングとして実施してきた。診断では、原因不明の発達遅滞が30名で一番多かった。初回時の年齢は、3歳までが69名と大部分を占めた。最終面接時の状況は、30名が療育活動へ紹介され、27名が正常と確認され、10名が保育園へ入園した。63名が1年未満で相談を終了し、57名が3回以内で相談を終了していた。初回面接時の発達検査の結果は、診断に対応した発達指数を示し、最終面接時の発達検査の結果は、最終面接時の状況に対応した発達指数を示していた。

[キーワード] 小児保健, スクリーニング, 相談, 発達, 面接

I 緒 言

筆者は、1982年から1993年まで11年間にわたって、岩手県内の某市において、隔月に発達相談を行ってきた。これは、乳幼児健診などの1次スクリーニングで発達に何等かの異常あるいは、異常の疑いのある乳幼児を対象として、2次スクリーニングとして実施してきたものである。この発達相談で、発達上の異常が本当にあった場合には、専門機関へ紹介し、発達上の異常がない場合は、それを確認するという振り分けの機能を果たしてきた。

* 岩手大学教育学部養護教育学科 E-mail: nazuma@msv.cc.iwate-u.ac.jp

今回、11年間の間に個別的な相談を行ったすべての対象児について概括的なまとめをしたので、その報告をする。

II 対象と方法

対象は、1982年4月から1993年3月までの11年間に岩手県の某市において、発達に関する相談を行った74名の乳幼児である。方法は、個人記録から、生年月日、初回と最終の面接年月日、新版K式発達検査の初回と最終の結果、診断名、最終面接時の状況、面接回数を整理して集計した。

III 結果と考察

表1 診断と初回に面接した年

	'82	'83	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	計
原因不明の発達遅滞	2	2	0	2	5	7	3	3	2	1	3	0	30
言語異常	1	5	0	1	2	1	0	1	4	1	1	1	18
正常	0	1	1	2	0	1	0	1	0	3	3	0	12
自閉症	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	4
ダウン症候群	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	3
てんかんによる発達遅滞	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	3
学習障害の疑い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
運動遅滞	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
小頭症	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
不明	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	4	9	3	6	8	12	4	5	8	6	8	1	74

'93年は、3月まで

表1に示すように、3月までの1993年を除いた1年間の相談人数は、最少で3名、最多で12名、平均して6.6名であった。

診断では、原因不明の発達遅滞が30名で一番多く、ついで、言語異常が18名、正常が12名であった。自閉症が4名、ダウン症候群が3名、てんかんによる発達遅滞が3名、学習障害の疑い、運動遅滞、小頭症、不明が各1名であった。原因不明の発達遅滞は、1984年以外は毎年相談があった。言語異常も、1984年と1988年以外は毎年相談があった。原因不明の発達遅滞は、主訴のほとんどが言葉の異常を訴えており、言語異常と合わせると、主訴としては、言葉の異常が過半を占めたことになった。

表2 診断と初回に面接した年齢

	0	1	2	3	4	5	6	計
原因不明の発達遅滞	2	10	12	4	1	0	1	30
言語異常	0	5	9	4	0	0	0	18
正常	2	5	2	1	2	0	0	12
自閉症	0	1	1	1	0	1	0	4
ダウン症候群	2	0	0	1	0	0	0	3
てんかんによる発達遅滞	0	2	1	0	0	0	0	3
学習障害の疑い	0	0	0	1	0	0	0	1
運動遅滞	0	1	0	0	0	0	0	1
小頭症	1	0	0	0	0	0	0	1
不明	0	0	1	0	0	0	0	1
計	7	24	26	12	3	1	1	74

表2に示すように、初回面接時の年齢は、1歳と2歳が合わせて50名と大部分を占めた。3歳までで69名となり、4、5、6歳では合わせてわずか5名であった。発達異常の早期発見という点で、この発達相談は機能を果してきたと考えられる。0歳で言語異常の相談がなかったのは当然であった。ダウン症候群のうち1名が3歳で初回に面接したが、この児は他からの転入児であった。

表3 診断と初回の新版K式発達検査の結果（全領域の発達指数）

	30	40	50	60	70	80	90	100	未実施	計
	39	49	59	69	79	89	99	109		
原因不明の発達遅滞	1	1	4	9	10	2	0	0	3	30
言語異常	0	0	0	0	9	7	1	1	0	18
正常	0	0	0	0	2	2	5	1	2	12
自閉症	0	0	0	1	1	0	0	0	2	4
ダウン症候群	0	0	1	0	0	0	0	0	2	3
てんかんによる発達遅滞	1	0	0	1	1	0	0	0	0	3
学習障害の疑い	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
運動遅滞	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
小頭症	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
不明	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
計	2	1	6	11	23	11	7	2	11	74

初回発達検査の結果は、表3に示す通りであった。当然のことであるが、原因不明の発達遅滞は、発達指数が90以上はいなかった。また、言語異常と正常は、発達指数が69以下はいなかった。発達指数が70から89までは、原因不明の発達遅滞と言語異常、および正常

が混在しているが、診断は単に発達指数だけで行なわれるのではなく、行動観察や既往歴などを総合的に判断して行なわれるからである。自閉症以下は、それぞれに対応した発達指数であった。発達検査を未実施の者が11名いたのは、多動のために実施できなかったり、実施する時間がなかったためであった。これらの児については、行動観察や他の簡便な検査を実施したりした。

表4 診断名と最終面接時の状況

	療育活動へ紹介	正常で相談終了	保育園入園で終了	理由なく中断	継続して相談	病院を紹介して終了	就学に関する相談	計
原因不明の発達遅滞	21	2	4	1	1	0	1	30
言語異常	2	12	3	0	1	0	0	18
正常	0	12	0	0	0	0	0	12
自閉症	3	0	0	1	0	0	0	4
ダウン症候群	1	0	2	0	0	0	0	3
てんかんによる発達遅滞	1	0	1	0	0	1	0	3
学習障害の疑い	1	0	0	0	0	0	0	1
運動遅滞	0	1	0	0	0	0	0	1
小頭症	1	0	0	0	0	0	0	1
不明	0	0	0	1	0	0	0	1
計	30	27	10	3	2	1	1	74

診断と最終面接の状況は、表4に示す通りである。表4で療育活動とは、初期には月に1回の活動であったが、しだいに回数が増え、現在では療育センターとして専門の職員が配置されて療育活動を実施している場である。原因不明の発達遅滞は、30名のうち21名がこの療育活動へ紹介され、2名は、最終面接時に正常と確認された。言語異常は、18名のうち12名が最終的には正常と確認されて終了した。正常は、当然全員が正常と確認された。全体でみると、74名中30名が療育活動へ紹介され、27名が正常と確認され、10名が保育園に入園することができて発達相談を終了した。これら3つの最終面接時の状況が大部分を占めた。理由なく中断した児が3名、1993年以降も継続して相談をする児が2名、病院を紹介して終了した児が1名、就学に関する相談をして終了した児が1名いた。

表5 最終面接時の状況と初回から最終面接までの経過した年

	0*	1	2	3	4	計
療育活動へ紹介	30	0	0	0	0	30
正常で相談終了	22	3	2	0	0	27
保育園入園で終了	6	3	0	0	1	10
理由なく中断	3	0	0	0	0	3
継続して相談	0	0	1	1	0	2
病院を紹介して終了	1	0	0	0	0	1
就学に関する相談	1	0	0	0	0	1
計	63	6	3	1	1	74

* : 0とは1年未満のこと

最終面接時の状況と初回から最終面接までの経過した年数を表5に示した。74名中63名が1年未満で相談が終了していた。この結果は、2次スクリーニングとしての発達相談が、専門機関へ紹介するという役目であることを考えると、当然の結果であった。療育活動へ紹介した児は、全員が1年未満であった。正常が確認されて相談が終了した児は、2年以内で全員が終了していた。保育園に入園できて終了した児のうち、1名が4年間相談を続けていた。この児は、ダウン症候群で療育活動や幼稚園に通園していたが、母親の情緒不安定のためのカウンセリングという意味で相談を継続していた。さらに、通園していた幼稚園の対応に対して不満があり、そのための相談という意味でも相談を継続していた。4年目にやっと、母親の満足のいく対応をしてくれる保育園に入園できたので、相談が終了したという例であった。理由なく中断、病院を紹介して終了、就学に関する相談は、全員が1年未満であった。1993年以降も継続して相談をしている児は、2年間と3年間相談をしていた。これらの児は、保育園や幼稚園に入園して療育を受けているが、親の希望で半年に1回ぐらいの間隔で、発達の推移を経過観察していた児であった。

表6 最終面接時の状況と初回から最終面接までの面接回数

	1	2	3	4	5	6	7	8	11	18	計
療育活動へ紹介	10	14	4	2	0	0	0	0	0	0	30
正常で相談終了	10	9	3	1	0	2	0	1	1	0	27
保育園入園で終了	0	2	1	1	2	1	2	0	0	1	10
理由なく中断	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
継続して相談	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2
病院を紹介して終了	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
就学に関する相談	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	23	25	9	6	2	4	2	1	1	1	74

次に、最終面接時の状況と初回から最終面接までの面接回数を表6に示した。この表と

表5は対応した結果であることは、当然のことである。74名のうち57名は、1～3回の面接で終了していた。療育活動へ紹介した児は、全員が4回以内であった。正常で相談を終了したうち、11回面接をした児もいた。最も面接回数が多かったのは、保育園入園で終了した18回で、これは、前述したダウン症候群の児であった。

表7 最終面接時の状況と最終K式発達検査の結果

	30 }	40 }	50 }	60 }	70 }	80 }	90 }	100 }	未 実 施	計
	39	49	59	69	79	89	99	109		
療育活動へ紹介	1	1	3	9	7	3	0	0	6	30
正常で相談終了	0	0	0	0	7	9	7	2	2	27
保育園入園で終了	0	1	2	1	2	2	1	0	1	10
理由なく中断	0	0	0	0	0	1	0	0	2	3
継続して相談	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
病院を紹介して終了	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
就学に関する相談	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
計	2	2	6	11	16	16	8	2	11	74

1回のみ発達検査を実施している児は、最終＝初回の結果としている。

最終面接時の状況と最終の発達検査の結果を表7に示した。療育活動へ紹介した児は、発達指数が89以下であった。正常で相談を終了した児は、発達指数が70以上であった。それ以外の児は、それぞれに最終面接時の状況に応じて発達指数は分散していたという結果であった。